

<<ワークショップ>> (9月5日 15:45-18:15)

【1号館B棟2F B2講義室】

発語・ジェスチャー・物理的環境の包括的記述に向けて
—会話分析の可能性と課題—

杉浦 秀行, 黒嶋 智美, 城 綾実, 牧野 遼作, Paul Cibulka

会話分析 (Conversation Analysis) の研究において, 近年, 発語だけでなく, 視線, 表情, 身体動作, 参与者間の身体配置, モノ, 物理的環境など, 参与者が進行中の相互行為の中で志向しうるあらゆる資源を視野に入れたマルチモーダル分析 (multimodal analysis) がひとつの潮流として形成されつつある. マルチモーダル分析では, ビデオ録画された相互行為のデータを繰り返し観察することによって, 時間の流れの中で展開されていく相互行為において, 参与者たちによって様々な資源がどのようなタイミングで組み込まれ, どのようにそれらの資源が互いに作用し合うことで認識可能な行為が達成されていくかを記述する.

本ワークショップは, 日本語データに基づく「会話分析を採用したマルチモーダル分析研究」の最新の研究成果を紹介し, マルチモーダル研究の特徴や利点について集中的に議論することを通じて, 国内の研究者へのマルチモーダル分析研究の普及と促進, さらに, 隣接研究分野 (会話分析以外の談話研究, ジェスチャー研究, 認知科学など) の研究者との意見交換を目的に行う. ワークショップは, マルチモーダル分析研究の概観と特徴についての紹介, 5つの話題提供, マルチモーダル分析の問題点や課題についてのフロアを含めての議論によって構成される.

<<ワークショップ>> (9月5日 15:45-18:15)

【1号館C棟2F C6講義室】

ウェルフェア・リングイステイクスと調査研究
—現場性・実践性という観点から—

野山 広, 杉澤 経子, 吉富 志津代, 石崎 雅人, 花崎 攝

本ワークショップ（以下WS）では、ウェルフェア・リングイステイクス（以下WL）を視野に実施される調査研究の在り方について改めて検討する。具体的には、岡（2012:27）が指摘した「実証的研究の現場に持ち込まれる考えや方法が、特定の研究領域のほとんどの研究者によって無自覚なままに共有されていたり、標準的なものとして無批判に受け容れられたりするために、それが問題であることすら自覚されないような問題も存在する。」という点に注目して、無自覚・無批判に導入される（されやすい）考え等について、WSの企画責任者・参加者の経験をもとに3部構成で情報共有、議論したいと考えている。第1部では、WSの企画責任者である、野山から、これまでのWLに関する論考をもとに、WSの企画意図を説明する。第2部では、現場性・実践性の観点から、無自覚・無批判に導入されてしまうと考えられる前提について、企画責任者である、野山とWS参加者である、吉富、杉澤、石崎、花崎から、事例（形成的フィールドワーク、多言語サービスの提供、実践研究の展開、医療コミュニケーション、法コミュニケーション、応用演劇などに関連した調査研究）を報告し、情報共有する。第3部では、第1部の説明、第2部での具体的な事例の紹介をもとに、WS聴講者を含め、より適したウェルフェア・リングイステイクス研究の進め方について議論を行い、今後の在り方について展望する。

<<ワークショップ>> (9月5日 15:45-18:15)

【1号館C棟1F C3講義室】

応用言語学から利害関係へのアプローチ
—制度的場面における第二言語使用—

古川 敏明, 岡田 悠佑, 小川 洋介

相互行為中のトークを対象とする諸研究は、日常的な世界と制度的な世界を探求してきた。職場やニュースインタビューのような制度的場面における会話は、日常的場面とは異なる制約を持ち、高度に組織化されていることが明らかにされている (Drew & Heritage, 1992; Clayman & Heritage, 2002)。また、重大な利害が絡むやりとりの分析としては、アメリカ、レーガン政権による秘密工作を究明しようとしたイラン・コントラ事件をめぐる公聴会を分析した研究がある (Bogen & Lynch, 1989)。しかし、以上のような研究は主に第一言語によるトークを分析対象としており、第二言語によるトークについては十分な研究の蓄積がない。

本ワークショップは制度的場面における第二言語使用に着目し、特に参加者にとって重大な利害が絡むトークを分析する。利害は会話分析とも関わりの深いディスコース心理学で論じられてきた概念であるが (Potter, 1996)、第二言語使用との関係は未探求の領域である。本ワークショップは応用言語学的な関心に基づき、第二言語としての英語あるいは日本語の実践を含む相互行為中のトークを対象にし、それぞれのトークに潜む制度性や参加者たちが志向するアイデンティティについて論じる。分析するデータは、日本企業の幹部が出席した米公聴会、大学英語授業の補佐員を選定する採用面接、レベル別判定のやり直しを求める留学生と教員のやりとりである。

<<ワークショップ>> (9月6日 14:45-17:15)

【1号館B棟2F B2講義室】

やりとりの中の記号・認知・文化
—言語コミュニケーション研究の学際的対話に向けて—

横森 大輔, 遠藤 智子, 木本 幸憲, 梶丸 岳, 井出 祥子

言語コミュニケーションの研究において、異分野間での学際的対話のための共通基盤は十分には整備されていない。Enfield (2013) は、新パース派の記号論を相互行為研究の知見と組み合わせ、言語コミュニケーションを統一的に記述説明するモデルを提案している。このモデルでは、言語を非言語行動や環境内の事物など記号一般の中に位置付け、日常の生活空間に埋め込まれたやりとりから儀礼を始めとする制度的場面までを一貫した形で記述する。また、記号使用とそれに伴う認知処理をやりとりの構造に基づく相対的な時間枠「エンクロニー」の中で記述することで、形態素や語の産出などのミクロな事象から社会文化的な制度や慣行などのマクロな事象までをシームレスに捉えられる。

本ワークショップでは、Enfield (2013) の言語コミュニケーションモデルを共通の足がかりとすることで、学問分野も研究対象も異なる研究の間で対話が可能になることを示し、さらなる協働に向けた課題を批判的に検討する。当日は、日本語会話における発話の重なりに関する会話分析的研究（遠藤・横森）、アルタ語の語用論的接語の記述に関する認知言語学的研究（木本）、そしてラオスの儀礼場面における掛け合い歌に関する言語人類学的研究（梶丸）という3件の話題提供の後、井出祥子氏による指定討論とフロアを交えた全体討論を行い、各事例研究が持つ理論的含意を多角的に検討する。

<<ワークショップ>> (9月6日 14:45-17:15)

【1号館C棟2F C6講義室】

まちづくりの話し合い学
—言語学・社会学からのアプローチ—

村田 和代, 森 篤嗣, 岡本 雅史, 増田 将伸, 井関 崇博

近年、まちづくりをめぐる課題探究や政策策定のプロセスで、市民参加型のセクターを超えた話し合いが行われることが多くなってきた。話し合いを通じたまちづくりに関して、都市計画や環境デザイン分野で研究が進められているが、まちづくりの現場の話し合いで行われるインタラクションに焦点を置いた研究はまだほとんど行われていない。言語・コミュニケーション分野においても、多人数インタラクションの研究は様々なアプローチから行われているが、目的志向型の話し合いに焦点を置いた研究は未だ萌芽期にある。日本社会には話し合いを行う土壌がない点が指摘されている一方、今後ますます社会的意思決定につながる市民参加型の話し合いの機会が増えるという状況を踏まえても、話し合いの研究を進め、これからの日本社会にふさわしい「話し合い」のあり方を提示していく必要がある。本ワークショップでは、まちづくりをめぐる市民参加型の話し合い談話の特徴や課題を、実際の話し合い談話を用いて、質的・量的、ミクロ・メゾといった多角的な視点から考察する。本ワークショップを通して、話し合い談話研究のフレームワークの構築や、ウエルフェアリングイスタイクスの観点から、言語・コミュニケーション研究を通じた市民参加型の話し合いの質的向上を考える契機としたい。さらに、言語研究のみならず他の研究分野の研究成果も融合した「まちづくりの話し合い学」についても考えたい。